

「日本におけるケミカルバイオロジー研究の新展開」  
に関する研究開発専門委員会  
第6回委員会 議事抄録

1. 日 時： 平成25年 8月 5日 14:00～19:30

2. 場 所： ホテル京阪 京都

3. 議 事： 14:00～17:20

- (1) 本日の議論の趣旨説明 および 研究開発専門委員会  
中間報告会について 長田委員長

中間報告会の予定

日時：平成25年8月30日（金） 13:00～17:00

（上記時間帯の間で、発表と質疑応答を含めて15-20分）

場所：(独) 日本学術振興会

- (2) 講 演（発表15分／質疑10分）

2-1) 「アカデミアにおける天然物創薬ケミカルバイオロジー」

～ 掛谷委員

京都大学薬学部における天然物創薬の取り組みについて概要説明があり、そのご、具体的な研究例として、微生物から新しい生理活性小分子化合物を探索する手法について報告があった。

2-2) 「化学プローブのデザイン・合成による in vivo イメージング」

～ 菊地委員

蛍光プローブがケミカルバイオロジーにおいて果たす重要性について紹介された。さらに、最近の研究例として、動物個体でタンパク質の可視化を可能にする手法を開発し、分子認識あるいは酵素反応の解析に成功したとの報告があった。

2-3) 「Meiji Seika ファルマの研究開発」

～ 味戸委員

明治製菓は2011年に経営再編があり、菓子・食品事業は(株)明治で行い、新薬・ジェネリック医薬品・農薬・動物用医薬品の各事業をMeiji Seika ファルマで行うことになったことの説明があった。明治製菓時代に培われた抗生物質の開発力は、現在のMeiji Seika ファルマに引き継がれているとの報告があった。

2-4) 「生合成遺伝子を用いた新規物質生産」

～ 新家委員

2013年に設立された次世代天然物化学技術研究組合に関して、産業技術総合研究所や国内の製薬企業がコンソーシアムを形成していることが紹介された。本組合の目的は、我が国が強みとする微生物ライブラリーの拡充であり、そのためには、創薬リード化合物候補となりうる広いケミカルスペースを持った天然化合物の生産に関わる生合成遺伝子の解析と、それを応用した化合物生産を効率的に行う技術開発が必要であること、5年先、10年先、20年先を見越して、今何をすべきかなど、創薬研究ともつながる長期的展望の重要性などを講演して頂いた。

2-5) 総合討論 (20分)

(3) 特別講演

「ウイスキーは日本の酒である」

～ サントリー酒類株式会社 興水精一 先生

最近、我が国のウイスキーは、国際的な酒類コンペの賞を総なめしているので、その躍進の裏話を紹介して頂いた。ウイスキー造りの根本にあるものは、“ものづくり精神”であり、先輩から後輩へ精神と技術が伝承されることが重要であるなど、薬の開発と共通性が多いことが紹介された。